日本中國學會報　第六十一集

巧姐の「忽大忽小」と林黛玉の死

―『紅樓夢』後四十回の構想考―

船越達志

はじめに

全一百二十回からなる現行本『紅樓夢』は、前八十回までが曹雪芹による原作であり、後四十回は別人による續作であると考えられている。[1] その續作部分、後四十回内部において、巧姐という女性（王熙鳳の一人娘）が奇妙な描かれ方をしている。巧姐は第八十八回において言葉も話せぬ嬰兒として登場した後、第九十二回において突然『列女傳』に興味を示すほどの成長した少女として紙面に現れる。しかし第一百一回においては、再び言葉を話すことができない嬰兒に戻って登場する。そして末回に近づくと、また成長して登場するようになる。この巧姐の奇妙な年齢變化は、「巧姐年紀、忽大忽小」、「暴長暴縮」と評され、『紅樓夢』の本格的研究がはじまり、後四十回が續作であることが強く意識されるようになった民國初年からすでに問題視されてきた。[2] 僅かの間に俄かに成長して俄かに又嬰兒に戻るのである。なぜこのような奇妙な描き方がなされているのか。本稿は、この問題を考察するとともに、〝續作者は後四十回をどのように描こうとしたのか〟、という後四十回全體の構想について考えてみようとするものである。なお、本稿が考察の對象とするのはあくまで後四十回についてであり、原作者曹雪芹の構想に關しては對象としない。

一　第九十二回「慕賢良一回」問題

曹雪芹による原作部分前半八十回内部において、巧姐は終始言葉を話せぬ嬰兒である。したがって第一回から順に讀んできた讀者にとっては、嬰兒の巧姐に違和感はない。一方、末回に近づいてから登場する成長した巧姐（例えば第一百十七回には、十三四歲と記されている）に對しても、末回付近は物語が收束に向けて急展開しているので、彼女の結末が描かれようとしているのだろうと考えれば、それほど奇異でもない。最も奇異なのは、第九十二回である。小説における時間の流れは、後半（續作）の始まった第八十一回と第九十二回は同一年内のことであり、第一百一回もその次年度のことであるにすぎず、[3] 殆ど時間は經過していないのである。つまり、巧姐の「忽大忽小」「暴長暴縮」問題は、なぜ第九十二回にのみ、突然成長した巧姐が登場したのか、という一點に焦點を絞ることができるように思われる。

以下、場面を確認しながら問題の第九十二回について見てみたい。[4]

この回、主人公賈寶玉が、賈母の誘いを受けて賈母の部屋へやってくると、巧姐もそこに來ていた。そこで寶玉は巧姐と會話を始める。

寶玉道「你認了多少字了。」巧姐兒道「認了三千多字、念了一本『女孝經』。半個月頭裡又上了『列女傳』。」寶玉道「你念了懂得嗎。你要不懂、我倒是講講這個你聽罷。」（「程甲本」[5]）

寶玉が「あなたはどのくらいの文字を讀めるようになりましたか。」と尋ねると、巧姐は「三千字以上讀めるようになりまして、『女孝經』を一冊讀みました。半月前からは、また『列女傳』に進んでおります。」と答えます。寶玉は「讀んでわかりますか。もしあなたがわからないのでしたら、私がそれを講釋してあげましょうか。」と言います。

ここに登場した巧姐は、寶玉と會話ができる「言葉の話せる」少女であるのみならず、すでに「三千字以上」の文字を讀めるようになり、『女孝經』を一冊讀み終え、「半月前からは、また『列女傳』に進んで」いるほどに成長した少女である。そして寶玉は、巧姐に向かって古今の女性達について語り始める。

寶玉道「那文王后妃是不必說了、想來是知道的。那姜后脫簪待罪、齊國的無鹽雖醜、能安邦定國。是后妃裡頭的賢能的。若說有才的、是曹大姑、班婕妤、蔡文姬、謝道韞諸人。……」

寶玉は言います。「かの文王のお后たちのことはもう言うまでもないですね、きっと知っていることと思います。かの姜后は、簪を取り去り處罰を待ち、齊國の無鹽は、醜くはあったが、國を安泰にすることができました。これらはお后たち中の賢能なものです。もし才能のあるものと言うなら、曹大姑、班婕妤、蔡文姬、謝道韞などの人たちです。……」

賈寶玉は、文王后妃や姜后を皮切りに、次々と古今の女性達を列擧し始める。長くなるので以下の文の引用は省略したが、「賢能的（賢能なもの）」「有才的（才能のあるもの）」「不厭貧的（貧しさを厭わなかったもの）」「苦的（辛い目にあったもの）」「孝的（孝行だったもの）」「守節的（貞節を守ったもの）」「艶的（艶やかだったもの）」「妬的（嫉妬深かったもの）」といった具合に、様々な人物二十人以上の名を列擧する（「講釋してあげましょうか」とは言うものの、實際には前掲の原文の如く、女性の名を「列擧」していくにすぎない）。

そしてひとしきり寶玉の話を聞いた巧姐は、大いに感銘を受けたという反應をする。

巧姐兒道「二叔叔纔說的、也有念過的、也有沒念過的。念過的二叔叔一講我更知道了好些。」……巧姐兒……還要寶玉解說『列女傳』……。

巧姐は言います。「二叔父様（寶玉）が先ほどおっしゃいますことは、讀んだものもありますし、まだ讀んでいないものもあります。讀んだことのあるものに關しては、二叔父様の講釋を聞きましていっそうよくわかりました。」……巧姐は、……寶玉にもっと『列女傳』に關して解說してもらおうとしました……。

第九十二回回目上句にも、「評女傳巧姐慕賢良（女傳を評して　巧姐は賢良を慕い…）」とあり、續作者は、この回のハイライトとしてこの場面を設けていることが窺える。以上が、巧姐が俄かに成長して登場する、問題の第九十二回における「忽大」「暴長」の場面である。そして先述の如く、第一百一回において巧姐は、再び言葉を話すことができない、ただ泣き聲をあげるだけの嬰兒に戻って（「忽小」「暴縮」）しまう。

那鳳姐剛有要睡之意、只聽那邊大姐兒哭了。鳳姐又將眼睜開。平兒連向那邊叫道「李媽、你到底是怎麼着。姐兒哭了你到底拍着他些。你也忒好睡了。」那邊李媽從夢中驚醒。聽得平兒如此說、心中沒好氣、只得狠命拍了幾下、口裡嘟嘟噥噥的罵道「眞眞的小短命鬼兒、放着屍不挺、三更半夜嚎你娘的喪。」一面說、一面咬牙便向那孩子身上擰了一把。那孩子哇的一聲大哭起來了。

鳳姐が眠氣を覺えたばかりの時に、あちらから大姐兒（巧姐を指す）が泣くのが聞こえました。鳳姐は又眼を開いてしまいます。平兒はしきりにあちらに向かって叫びます。「李ばあや（巧姐の乳母の李ばあやを指す）、あなたはいったいどうしているというの。お嬢様が泣いているのだからちょっと（布團の上から）叩いてあやしてあげたらどうなの。あなたも寢てばっかりなのね。」あちらの李ばあやは夢の中からはっと目を覺まします。平兒がこのように言うのを聞いて、心中面白くないのですが、しかたなく懸命に何回か（巧姐を）叩き、口の中ではぶつぶつと次のように罵るのでした。「まったくこのくたばり損ないの餓鬼は、屍をぴんとまっすぐに横たえておかずに、こんな眞夜中に母親の葬式をするみたいに大聲で泣き叫ぶんだから。」こう言う一方で、齒軋りしながらその子（巧姐）をぎゅっとつねるのでした。その子（巧姐）は、わあっと泣き出してしまいます。

巧姐のこの年齢の變化は、兪平伯氏によって、後四十回（續作部分）における缺點（毛病）の一つとしてとりあげられた（兪氏は、全部で二十箇所の「毛病」を指摘する）。巧姐が〝金陵十二釵〟に數えられるほどの重要人物であるにも關わらず、曹雪芹の八十回内においては全く活躍する場面がなかったので、續作者は第九十二回に特に前掲の場面（以下、兪氏に倣って「慕賢良一回」と稱する）を設け、彼女を紙面に押し出したのだろう、と說明する。巧姐の年齢に注意が及ばなかったことは、續作者の單純ミスと考える。(6)

一方、趙岡氏は、後四十回にも原作者曹雪芹の構想が反映していると說く自說を論證する證據の一つとして、この問題を取り上げた。というのは、原作者曹雪芹は、元來王熙鳳に二人の娘（巧姐と大姐）を設定していたが、後になって巧姐一人に變更した痕跡があるからである。(7) 趙氏は、後四十回は、曹雪芹による舊稿を熟知した曹家の人閒（脂硯齋を想定）によって書かれたものであり、高鶚は整理者にすぎないと考え次のような說を唱える。卽ち、舊稿を熟讀していた續作者（脂硯齋）は、曹雪芹の元來の設定を反映させ、二人の王熙鳳の娘を描いた。一人は文字の讀み書きができる年長の娘（姉）であり、もう一人は嬰兒（妹）である。そして後に高鶚は、整理の際、前八十回（すでに曹雪芹によって一人の娘に變更された新稿）と統一するため、これを一人に變更した。もと年齢差のある二人を俄かに一人に變更したため、「暴長暴縮」という現象がおきてしまった、とするのである。(8)

また野口宗親氏は、楊繼振舊藏、中國社會科學院文學研究所藏『乾隆抄本百廿回紅樓夢稿』（以下「夢稿本」と略稱）を詳細に調査した結果から、後四十回の「原作者」と、その「改訂者」をそれぞれ想定し、二人の「巧姐に對する認識の差」が原因で年齢に混亂が起こったと見る。卽ち、後四十回の「原作者」は巧姐を年齢の大きな少女として考えていたのに對して、「改訂者」は「赤子」と考えていたのだろうとするのである。「夢稿本」後四十回には、「短く簡單な本文」を塗改した箇所が大量にあるが、その塗改前の「簡單な本文」には、後四十回の「原作者」の元來の文章が反映していると野口氏は見る。野口

氏は後四十回における巧姐の主な登場箇所計八箇所をピックアップした上で、塗改前の「簡單な本文」には、嬰兒の巧姐が一例も見られないことを論據として前掲の推論を導こうとする。しかし肝心の第九十二回と第一百一回には、塗改がなく（これらの回は程本刊行後に「程乙本」によって寫されたものとみられる）、前掲の推論は憶測の域を出ない。野口氏自身「第九十二・百一回については、殘念ながら「稿本」から手掛を得ることは出來ないので、なおこの兩回の交錯については若干の疑問が殘る」と述べている。[9] 薛洪氏も野口氏に近い見方をしている。[10]

その後もこの問題は、兪平伯氏の言う如く續作者のミス、失策としてしばしば言及されている。[11] しかし、兪平伯氏の單純ミスとの結論は、考察が簡單にすぎる嫌いがあるし、趙岡氏の續作者を脂硯齋とする結論も獨斷にすぎる嫌いがあり、從いがたい。また野口氏、薛洪氏の版本に基づいた實證的推論も、なぜ續作者と改訂者の間に、年齢認識の差が出たのか、という肝心の考察が十分になされておらず、推測の域をでない。いずれも十分な結論とは言えない。

筆者は、續作部分の展開に則して、この問題が生まれた背景、即ち、續作者の構想という側面に注目すべきだと考える。この第九十二回における巧姐の「忽大」「暴長」は、續作者のある大きな構想と一環の設定であり、單なる單純ミスと片付けるべきではないと思われる。その構想を考察するためには、この一場面だけではなく、後四十回全體に目を向ける必要がある。まず注目すべきは「慕賢良一回」の直後の記述である。

二　司棋の死

前章で見てきた第九十二回における「慕賢良一回」の直後、續作者の筆は、一轉して巧姐の母、王熙鳳へと向く。

且說鳳姐因何不來。頭裡爲着倒比邢王二夫人遲了不好意思、後來旺兒家的來回說「迎姑娘那裡打發人來請奶奶安、還說竝沒有到上頭、只到奶奶這裡來。」……那人道「……奴才竝不是姑娘打發來的。實在是司棋的母親央我來求奶奶的。」

さて鳳姐（王熙鳳）はなぜ（賈母の部屋に）來なかったのでありましょうか。はじめは邢夫人や王夫人よりも遲れてしまったので氣まずく思ったからなのですが、後に旺兒の妻がやってきて次のように報告したからなのです。「迎春お孃さまの所から奧樣にご機嫌伺いの人を寄越して參りましたが、奧の方へは上がらず、奧樣の所へのみ來ました、と言うのです。」……（王熙鳳がその人物を呼び寄せると）その人物は「……私はお孃さま（迎春）がお寄越しになったのではないのです。實は、司棋の母親から、奧樣にお願いしてほしい、と賴まれて參ったのです。」と言うのでした。

巧姐の母、王熙鳳は、この人物を通して「司棋の母親」の賴みごとを聞いていたため、賈母の部屋（寶玉と巧姐が話をしている所）に顏を出せなかったという設定になっている。前掲の引用箇所以下、王熙鳳が司棋に纏わる報告を聞くという展開が續くが、これは小說內の時間軸において「慕賢良一回」と「同時刻」になされている報告である、という點が注目に値する。

那人道「自從司棋出去、終日啼哭。忽然那一日、他表兄來了。他

母親見了、恨得什麼是的、說他害了司棋、一把拉住要打。那小子不敢言語。……

その人物が言いますには、「司棋は（賈家から追い出されて）出て行ってからというもの、終日泣き續けておりました。そこへ突然ある日、あの娘の從兄（潘又安）がやってきたのです。あの娘の母親は見ると、ひどく恨んで、彼（潘又安）が司棋を臺無しにしたのだと言い、ぐいっとつかみ打とうとしました。そいつの方はあえて言い返しません。……

その人物は、このようにして司棋に關する顛末を王熙鳳に語りはじめる。曹雪芹の原作部分末尾において、賈迎春の侍女、司棋は從兄[12]の潘又安と人目を忍ぶ戀仲であったが、二人の關係が公になったため（第七十四回）、賈家大觀園を追放になった（第七十七回）。一方の潘又安も失踪していた（第七十二回）。ここではその後日談が語られているのである。司棋は賈家追放後泣きつづけて暮らしていたが、ある日、失踪中の戀人潘又安が戻ってきたというのである。

誰知司棋聽見了、急忙出來、老着臉和他母親道『我是爲他出來的、我也恨他沒良心。如今他來了、媽要打他、不如勒死了我。』……司棋說道『……今兒他來了、媽問他怎麼樣。若是他不改心、我在媽跟前磕了頭、只當是我死了。他到那裡、我跟到那裡。就是討飯吃也是願意的。』

ところが、司棋はこの様子を耳にすると、あわてて飛び出てきて、面の皮を厚くして母親に向かって言ったのです。『私はこの人のために（賈家を追い出されて）出てきたので、私もこの人に良心がないことを恨んでおりました。今この人が參りましたのに、お母さんはこの人を打とうとする。それなら、いっそのこと私を絞め殺したら良いですわ。』……司棋が言いますには、『……今日この人が參りましたので、お母さん、この人がどうするつもりなのか尋ねてください。もしこの人が心を變えていないのならば、私はお母さんの目の前で叩頭しますから、私が死んでしまったものとお思いください。この人の行く所どこへでも私も參ります。たとえ乞食をしようと願うところです。』

司棋は母親に對して、戀人潘又安を庇い、一生潘又安に添い遂げたいとの希望を切々と訴える。

……他媽氣得了不得、便哭着罵着說「你是我的女兒。我偏不給他、你敢怎麼着。」

……あの娘の母親は（聞くと）かんかんに怒って、泣きながら罵るのでした。「お前は私の娘だ。私がどうあっても（お前を）こいつにはくれてやらないとしたら、お前はどうする。」

ところが、司棋の母親は、娘の希望を聞き入れようとせず、斷固として反對する。娘が賈家を追い出された原因が潘又安であるため、司棋の母親は彼を憎んでいるからである。すると、

那知道那司棋這東西糊塗、便一頭撞在牆上、把腦袋撞破、鮮血直流、竟死了。

なんと、この司棋という大ばか者は、頭を壁に打ち當ててしまい、腦が裂け、鮮血が直流し、死んでしまったのです。

なんと司棋は自ら壁に頭を打ち當て命を絶ってしまった、というのである。劇的な最期である。この話は更に後日談がある。潘又安は、元々司棋に結婚を申し込むつもりだったのだが、死んだ司棋を葬ると、自らも短刀で命を絶ってしまう。このいきさつが近所に知れ渡り、お上に屆けられそうな情勢なので、あわてた司棋の母親は何とか役人にと

りなしてもらおうと、王熙鳳を頼って來たということなのである。

窮地に追い込まれた司棋の母親の狼狽はともかく、ここで注目すべきは司棋自身の行動である。司棋は、戀人潘又安と添い遂げることができないと悟るや否や自ら命を絶つ。この司棋の行動は、まさにこの「同時刻」に寶玉が巧姐に講釋している女性達の行動に重なるものである。第一章で述べたように、賈寶玉は樣々なタイプの女性達二十人以上を次々と列擧するが、その中には次のような箇所がある。

寶玉道「……那個曹氏的引刀割鼻、是魏國的故事。那守節的更多了、只好慢慢的講。……」

寶玉は言います。「……かの曹氏が、刀を引き拔き鼻を切り落としたのは、魏の國のお話です。かの貞節を守ったものはもっと澤山おりますので、いずれゆっくり說明させていただくしかありません。……」

「曹氏的引刀割鼻」とは、魏の曹文叔の妻が、夫の死後、刀で耳や鼻を切り落として再婚拒否の意思表示をした故事である。[13] そして「那守節的（かの貞節を守ったもの）」達は、「更多（もっと澤山いる）」ということで、具體的に例が擧げられないが、貞節を守るために、自ら命を絶った女性達のことを指しているのは明白である。司棋の死は、これら「守節的」の女性達の心意氣を連想させる。ただし司棋が操を立てた潘又安は、自分の意思で見つけた相手であり親の許しも得ていない（この點は曹雪芹の設定である）。その點は儒敎倫理に背き、寶玉の語る「守節的」とは大きく違う。それについて司棋は次のように言っている（以下は〝續作者〟の設定である）。

司棋說道「一個女人配一個男人。我一時失脚、上了他的當、我就是他的人了。決不肯再失身給別人的。我恨他爲什麼這樣膽小。一身作事一身當、爲什麼要逃。就是他一輩子不來了、我也一輩子不嫁人的。媽要給我配人、我原拚着一死的。……」

司棋は言います。「一人の女人は一人の男の方に嫁ぐものです。私はふと足を踏み外し、この人に騙されてしまった以上、私はこの人のものです。ですから私は決して再び貞操を失って他の人に嫁ぐことに同意はいたしません。恨めしいのは、この人がどうしてこんなにも肝が小さいのかということですわ。自分のしたことは自分で責任をとるべきですのに、どうして逃げようとしたのでしょう。たとえこの人が一生來てくれなくても、私はやはり誰にも嫁ぎませんわ。お母さんがもし私を誰かに嫁がそうとするのならば、私は元々死ぬつもりでおりました。……」

なれそめは、「私はふと足を踏み外し、この人に騙されてしまった（我一時失脚、上了他的當）」というものであった、と自らも非を認めている。だが、一旦「この人のもの（我就是他的人了）」になってしまったからには、とことん操を立てる、という論理である。續作者はこのように設定して司棋の死に、「守節的」の女性達の心意氣をオーバーラップさせ、肯定的に描こうと試みているのである。事實、清代の李慶辰はこの回に「司棋是烈女」と評を付し、また張子梁も、司棋と潘又安を「眞是烈婦義夫」と評している。[14] これらの評は、司棋を夫や婚約者に操を立て、命がけで「貞節を守った」女性達、卽ち「烈女」と同一視しているのである（婚約者の後を追って自殺する未婚の女性を「烈女」という）。[15] これら清代の讀者の反應は、筆者の上述の見方を裏付けていよう。烈女を含む女性達を語る賈寶玉の形象は、前八十回に見られた曹雪芹の寶玉とは大きく異なるが、〝續作者〟はこれらの女性達を肯定的に見ている。

ここまで見てくると、續作者の意圖は明白である。續作者は、司棋の死に「烈女」のイメージを重ね合わせようとして、一連の場面を描いてきたのである。賈寶玉が長々と巧姐に講釋を行なう「慕賢良一回」の場面は、ひとえに司棋の死に「烈女」のイメージを重ねるためのものであったのである。巧姐が寶玉の『列女傳』講義を聞いているまさに「同時刻」に、「巧姐の母」王熙鳳が、司棋の死の報告を聞いている、というかなり暗示的な、言いようによっては「できすぎた」構造になっていることは、まさにこの續作者の苦心を物語っているのではなかろうか。

なお寶玉は、曹氏や「守節的」の說明の他にも、二十人以上の女性を同列に列擧しているが、この點について筆者は以下のように考える。續作者の意圖は司棋に烈女を重ねることにあるが、もし寶玉がここで、夫や婚約者に操を立て、命がけで貞節を守った壯絕な女性ばかりを强調して、そのような女性を次々と列擧し、巧姐に語って聞かせたら、いびつな場面になってしまい、曹雪芹の前八十回に見られた男性を蔑視し、男に嫁ぐ女性を歎いていた寶玉の形象との不統一がより際立ってしまう。それでは讀者に奇異の念を抱かせてしまう事になる。そのため、樣々な女性達を列擧する合閒に曹氏や「守節的」の說明をさりげなく挾み込んだと見たいのである。[16]

巧姐が第九十二回において突然成長する「忽大」「暴長」の理由はまさにここにあったのではないだろうか。繰り返しになるが、續作者は、司棋の死に「烈女」のイメージを重ねるために―卽ち、讀者が司棋の死について讀んだ時に烈女をも含む女性達を想起するように―、『列女傳』の講釋を行なう場面をその直前（しかも同時刻という設定）に置くことにした。司棋の死の報告を聞く人物は、賈家の奧向きを一手に牛耳っている王熙鳳が最も妥當である。ならば、『列女傳』の講釋を聞く人物は、王熙鳳と最も密接な女性、卽ち王熙鳳の一人娘巧姐が最も相應しい。王熙鳳が司棋の死を聞いている「同時刻」に、「王熙鳳の娘」である巧姐が『列女傳』の內容に聞き入っていることによって、〝司棋＝烈女〟という讀者へのメッセージはより鮮明になるからである。このような發想で、續作者はこの第九十二回を設定した。巧姐は當然、『列女傳』講義が理解できる年齡で登場しなければならない。こういう必要から巧姐は俄かに「忽大」「暴長」したのである。

では第一百一回の巧姐についてはどう考えるか。第九十二回において、巧姐を一旦「忽大」させた以上、再び巧姐を嬰兒に戻すことに續作者は何の矛盾も感じなかったのか。この點に關して思い合わされるのが、野口宗親氏や薛洪氏の說である。卽ち、續作者と整理者（高鶚？）の二人を想定した上で、前者は、巧姐を年齡の大きな少女として捉えていたのに對して、後者は嬰兒と考えていたとする說である。續作者は司棋との關連から巧姐を成長させる必要があったのだが、整理者は單純に前八十回の形象に合わせて嬰兒と捉えていたのではないだろうか。第一章では、兩氏の說に對して「なぜ續作者と改訂者の閒に、年齡認識の差が出たのか、という肝心の考察が十分になされておらず、推測の域をでない」と述べたが、このようにそれぞれの意圖が想定できると、この說は俄に說得力を帶びてくる。日中兩國において、二人の學者が同じ問題を「夢稿本」の調査から考察した際、ほぼ同じ結論を導きだしていることも傾聽に値しよう。前揭の王佩璋氏（注16參照）、趙岡氏いずれも續作者と整理者（高鶚）を想定しているように、高鶚以前に續作者を想定するのはすでに一般的な有力な考えである。もしそうなら、第一百一回等は、續作者の原稿ではなく、高鶚が後に付け

足したものとなる。また第一章で一應は「それほど奇異でもない」とした末回付近の巧姐に對してもいっそう合理的に理解できる。[17]

本筋に戻りたい。以上の考察により、司棋に烈女のイメージを重ねようとする續作者の意圖が明らかになったが、これは、單に司棋一人のみに關わる小さな構想ではない。卽ち、この第九十二回だけの問題ではなく、後四十回全體に關わる大きな構想の一端と思われるのである。以下、この點について述べていきたい。注目すべきは、林黛玉である。

三　林黛玉の死

ヒロイン林黛玉の結末は、後四十回における最大の山場と言っても過言ではない。原作者曹雪芹は、前八十回において林黛玉と賈寶玉の戀愛感情を設定している。そして同時に、林黛玉が悲戀のまま早死してしまうことも隨所に暗示している（第五回他）。一方の賈寶玉は、薛寶釵と結婚することが暗示されている。與えられたこのアウトラインにそって、いかに林黛玉の死を描くか、これは續作者にとっては腕の見せ所でもあったろう（大まかな配置としては、續作者は、林黛玉の死を、後四十回のほぼ中間點、第九十八回に設定した。これを境として、第九十八回以前は主に林黛玉の死及び賈寶玉と薛寶釵の結婚を主なテーマとし、第九十八回以後は賈家抄沒と賈寶玉の悟りの過程が描かれることとなる）。

以下、後四十回における、その死（第九十八回）に至るまでの林黛玉の設定について見ていきたい。

續作者は、後四十回開始直後に、林黛玉に次のような感想を述べさせている。

當此黃昏人靜、千愁萬緒堆上心來、想起「自己身子不牢、年紀又大了。看寶玉的光景、心裡雖沒別人、但是老太太舅母又不見有半點意思。深恨父母在時、何不早定了這頭婚姻。」

この黃昏の人靜かな時に當たって、千萬の憂愁の思いが心に積もってきて、次のように思うのでした。「自分の身體は丈夫ではなく、また年齡も大きくなってしまった。寶玉さんの樣子を見ると、そのお心には誰か他の人がいるようではないけれど、大奧樣（賈母）やおば樣（王夫人）には又いささかも（私をお嫁に選んでくれる）お氣持ちが見えない。お父樣お母樣がご健在だった頃に、どうして早くにこの婚姻を決めてくださらなかったのか、とても恨めしいわ。」（第八十二回）

ここに設定された林黛玉は、賈寶玉との婚姻を強く望んでいる。また引き續き次のようにも考える。

又轉念一想道「倘若父母在時、別處定了婚姻、怎能彀似寶玉這般人材心地。不如此時尙有可圖。」心內一上一下、輾轉纏綿、竟像轆轤一般。

また思い返して、「もしお父樣お母樣がご健在だった頃に、別の所に婚姻を決めていたら、（その相手の人は）どうして寶玉さんのような器量、心根でありえようか。現在のように、まだ（彼との婚姻を）求めることができるだけましだわ。」心の中では、（このような想いが）浮かんだり消えたりし、轉々とまわってまとわりついて、さながら轆轤のようであります。（第八十二回）

ここにも同樣の想いが強く示されている。續作部分における林黛玉は、あたかもこの一事だけしか頭にないかの如く描かれていくことになる。その夜、林黛玉は惡夢を見る。夢の中で彼女は全く見知らぬ人物の元

へ嫁がされそうになる。黛玉は必死に拒絶するが、賈母は全く耳をかさない。その描寫は次のように記される。

黛玉哭道「我若在老太太跟前、決不使這裡分外的閒錢、只求老太太救我。」賈母道「不中用了。做了女人、終是要出嫁的。你孩子家不知道、在此地終非了局。」……黛玉情知不是路了、求去無用、不如尋個自盡。

黛玉は泣きながら言います。「私がもし大奥様の膝下におりますならば、決して、餘分な無駄金を使ったりはいたしませんので、どうか大奥様、私をお救いください。」賈母は「無駄だよ。女性に生まれたからには、最後にはお嫁にいかなければいけないものなのだよ。お前は子供だからわからないだろうがね、ここにいてはいつまでも身のふりがつかないのだよ。」と言います。……黛玉は見込みがない、頼んでもどうしようもない、自ら命を絶つほうがましだ、とわかりました。（第八十二回）

寶玉以外の人物と結婚せねばならないのなら、「自ら命を絶つほうがましだ（不如尋個自盡）」と考えている點が注目される。黛玉のこの考えは、第二章で考察してきた司棋の發想と同じである。とはいえ、前八十回の黛玉のイメージを引き繼がねば續作として讀者は納得しない。いくらなんでも司棋の如き强烈な自盡は、前八十回の病弱で涙もろい黛玉の形象とは一貫しない。そこで續作者は次のような設定を施す。

（黛玉）回到房中、看着花、想到「草木當春、花鮮葉茂。想我年紀尚小、便像三秋蒲柳。若是果能隨願、或者漸漸的好來。不然只恐似那花柳殘春、怎禁得風催雨送。」想到那裡、不禁又滴下淚來。

（黛玉は）部屋に戻り、花を見ながら、次のように思うのでした。

「草木は春に當たれば、花は鮮やかに咲き葉も茂る。でも思うに、私は年がまだ若いというのに、三秋（九月）の蒲柳のよう。もし果たして願いがかなうなら、あるいは次第に身體が良くなるかもしれない。そうでなければ、かの晩春の花柳のように、どうして風や雨に耐えられましょうか。」そこまで思うと、思わずまた涙を落とすのでした。（第八十六回）

「もし果たして願いがかなうなら（若是果能隨願）」の「願」とは、寶玉に嫁することである。卽ち、寶玉と結婚できるなら身體は健康になるが、できぬならそのまま身體は弱まり死へと向かうだろう、というのである。こういう展開なら前八十回の黛玉とさほど違和感ない、と續作者は考えたのではないか。

そして續作者は、黛玉にこれを實踐させていく。第八十九回、黛玉付きの侍女紫鵑と雪雁が、寶玉と他家の娘との緣談が決まったらしいとの噂（この話自體はデマにすぎないのだが）をする。黛玉は偶然これを耳にしてしまう。

誰知黛玉一腔心事、又竊聽了紫鵑雪雁的話。雖不狠明白、已聽得了七八分、如同將身撂在大海裡一般。思前想後、竟應了前日夢中之讖、千愁萬恨、堆上心來。左右打算、不如早些死了、免得眼見了意外的事情、那時反倒無趣。又想到自己沒了爹娘的苦、自今以後、把身子一天一天的遭塌起來、一年半載、少不得身登清淨。打定了主意、被也不蓋、衣也不添、竟是合眼裝睡。

ところが黛玉には胸にあふれんばかりの心配事があり、さらにまた紫鵑と雪雁の話を盗み聞きしてしまったのです。はっきりとは聞き取れませんでしたが、すでに七八割方聞き取り、その身が大海に捨てられたかの如く感じました。今までのこと、これからの

ことに考えを巡らしますと、なんと先日の夢の中の豫言に對應しておりますので、千萬の愁い恨みが、心に積み重なってきました。あれこれ考えると、早くに死んでしまうにこしたことはない、心外な事柄を目のあたりに見て、その時にかえってつまらない思いをするようなことも避けられる。また自分には父母がいない苦しみに思い至り、今後は、身體を一日一日と粗末にするようにしよう、そうすれば半年か一年のうちには、この身は煩惱から離れて清淨な彼岸にいけるに違いない。こう氣持ちが定まると、ふとんもかけず、衣も足さず、あろうことか目を閉じて眠ったふりをするのでした。

事實無根のデマ話を眞に受けた黛玉は、寶玉と結婚できないのなら、「身體を一日一日と粗末にするようにしよう」、そうすれば「半年か一年のうちには、この身は煩惱から離れて清淨な彼岸にいけるに違いない」と決意する。身體を粗末にするというのは具體的には、「ふとんもかけず、衣も足さず」、「目を閉じて眠ったふりをする」というが如くであるが、この發想と行動は、結果として司棋と全く同じである點が注目される。更に同回には次のような描寫も見られる。

原來黛玉立定主意、自此以後有意遭蹋身子、茶飯無心、每日漸減下來。……（黛玉）也不肯吃藥、只要速死。……一日竟是絕粒、粥也不喝、懨懨一息、垂斃殆盡。

實は黛玉は考えを決めてから、これより後はわざと身體を粗末にし、水も飯ものどを通す氣がなく、毎日その量を次第に減らしていくのでした。……（黛玉は）藥も飲もうとせず、ただ早く死にたいとのみ望んでいるのでした。……ある日なんと絕食し、粥さえもすすらず、息も絕え絕えで、まさに死にそうな樣子であります。

やがて黛玉は、寶玉と寶釵の婚姻が祕密裏に進められていることを傻大姐という侍女の口から聞き知ってしまう。彼女は、衝撃のあまり正氣を失い、血を吐いてしまう。

原來黛玉因昨日聽得寶玉寶釵的事情、這本是他數年的心病、一時急怒、所以迷惑了本性。……此時反不傷心、惟求速死以完此債。

もともと黛玉は昨日寶玉と寶釵の事（婚姻）を聞き得たため、これが本來彼女の數年來の心配事であったので、とっさにかっとなってしまい、そのゆえに正氣を失ったのでありました。……この時にはかえって心を痛めたりせず、ただ早く死んでしまってこの負債を返し終えてしまいたいとばかり望んでいるのでありました。（第九十七回）

事情を知った黛玉は、ただ早くに死んでしまいたいとの氣持ちを強くしてゆく。

紫鵑料是要絹子、便叫雪雁開箱、拿出一塊白綾絹子來。黛玉瞧了、撂在一邊、使勁說道「有字的。」紫鵑這纔明白過來、要那塊題詩的舊帕。……只見黛玉接到手裡也不瞧詩、扎掙着伸出那隻手來狠命的撕那絹子。卻是只有打顫的分兒、那裡撕得動。紫鵑早已知他是恨寶玉、卻也不敢說破、……

紫鵑は、（黛玉が）ハンカチを要求しているのだと思って、雪雁に箱を開けさせ、一枚の白綸子のハンカチを取り出させます。黛玉は見ると、かたわらにうち捨ててしまい、力を入れて「文字の書いてあるものよ。」と言うのでした。紫鵑はこれでやっと、あの詩を題した古いハンカチを要求しているのだ、とわかったのでした。……黛玉は手に受け取ると詩を見ようともせず、もがくよ

うにその一本の手を伸ばして懸命にそのハンカチを引き裂こうとするのでした。しかし（ハンカチを）ぶるぶる震わす程度の力しかありませんので、どうして引き裂けましょうか。紫鵑はとっくに彼女が寶玉を恨んでのことであろうとはわかっているのですが、そう指摘するわけにもいきません、……

第九十七回、黛玉はいまわの際の最後の力を振り絞って、喀血しながらも古いハンカチを破り捨ててしまおうとする。このハンカチは賈寶玉が第三十四回で黛玉に送ったもので、二人の愛情の證であった。[18] そのハンカチに黛玉が書き付けた詩には、彼女の心境が詠み込まれている。この後黛玉は、自分のか細い腕ではハンカチを引き裂くことはできないと知るや、それを火の中に投げ入れ燃やしてしまう。これは、寶玉との結婚を完全にあきらめたことを示している。黛玉なりの、この世との決別とも言える。そして第九十八回には、黛玉がついに命を失ってしまう様子が描かれる。

三個人纔見了不及說話、剛擦着、猛聽黛玉直聲叫道「寶玉、寶玉、你好―」說到好字、便渾身冷汗、不作聲了。……只見黛玉兩眼一翻、嗚呼、「香魂一縷隨風散、愁緒三更入夢香。」

三人（探春、紫鵑、李紈）が顔を合わせても話をする閒もなく、ちょうど（黛玉の）身體を拭いていると、突然黛玉が聲をあげて「寶玉、寶玉、あなたよく（你好）―」と叫び、「好」の文字まで言うと、全身に冷や汗をかき、聲をなくしてしまいました。……

黛玉の兩方の眼はくるりとむいてしまい、ああ、「香魂　一縷風に隨って散り、愁緒　三更　夢に入りて香る。」

このようにして、ヒロイン林黛玉は絶命する。[19]

黛玉は、司棋の如く自ら壁に頭を打ち當て命を絶ったわけではない。「烈女」と言える激しさもない。しかし、見てきた如く、彼女の思考の流れは、司棋と全く同じ流れであった。自らが望む相手と結婚できないのなら、死を選ぶというものである。更には、相手の誠意を誤解したまま死にゆくという點まで同じであることが注目される。司棋の戀人潘又安は、司棋に結婚を申し込むつもりで司棋のもとを訪れていた。また賈寶玉は、相手を林黛玉と思い込んで、寶釵との婚禮にのぞんだ。潘又安と賈寶玉は、いずれも誠實に戀人に報いようとしていたのである。しかし、司棋も黛玉も、その相手の眞意を誤解したまま絶望して生命を絶つ。續作者は意圖的に兩者の展開を同じにし、讀者に連想させようとしているかのようである。司棋の如く激烈な自盡ではないが、黛玉はもともと身體が弱いので、失意のあまりそのまま絶命するという展開になっているにすぎない。つまり、第九十二回における司棋の死は、林黛玉の死の前觸れであり、その死を豫告するものだったのである。逆に言うなら、林黛玉の死を描くために、司棋の死をその直前に設定したのだとも言えよう。見てきた如く、司棋の死には烈女のイメージが重ねられている。續作者は、黛玉の死に司棋の死を重ねることによって、烈女のイメージをも取り込もうと企てているのである。念のために付記するが、筆者は林黛玉が烈女だと言っているのではない。烈女のイメージを些かなりとも林黛玉に「漂わせよう」と、〝續作者（曹雪芹ではない）〟が苦心して、「意圖している」、ということである。筆者の考察の對象は、あくまで「續作者の構想」である。

ここで續作者の設定をもう一度整理してみたい。ヒロイン林黛玉の死は、後四十回における最大の山場である。曹雪芹は、彼女が悲戀のまま早死してしまうことを前半に於いて暗示しているが、それをどう描ききるか、これが〝續作者〟に與えられた課題であった。〝續作者〟

は、そこに肯定しうる（と續作者が考える）女性・烈女のイメージを重ねよう（〝漂わせよう〟くらいのほうが適當か）と考えた。ここで「媒介」に使われたのが司棋である。彼女は前八十回において氣性の激しい女性として設定されていた。烈女に重ねやすい。黛玉の死の直前に、司棋の死を描き、そこに烈女のイメージを重ねることによって、間接的に烈女のイメージを黛玉に「漂わせよう」としたのである。ある別の人物を通して、林黛玉の死を暗示する手法は、曹雪芹による前八十回においても見られた。林黛玉の「影子（ダミー）」である晴雯が第七十八回において死亡することを通して、後半における林黛玉の死を暗示しているのである。續作部分、後四十回における司棋は、「死」という一點において、黛玉の「影子」となっている。即ち、①「黛玉の死を描くために」、②「司棋の死が設定され」、そこに「烈女」のイメージを重ねるために、③「巧姐が『列女傳』講義を聞く「慕賢良一回」が設定された」、という①→②→③の發想（續作者の發想）の流れだったと思われる。

第二章で見てきた如く、續作者は司棋の死に烈女のイメージを重ねるために、周到な設定をしている。ひとつは、司棋の死が報告される「同時刻」に、『列女傳』講義がなされるという〝時間〟の設定、もうひとつは、司棋の死を報告される王熙鳳の〝娘〟が、『列女傳』講義を聞くという〝人物〟の設定である。そのような理由から、續作者は『列女傳』講義の聞き手は、どうしても巧姐にしたかったのである。

ここまで考察すれば、冒頭の問題―巧姐の「忽大」「暴長」問題―には、それなりの理由のあったことが窺えるのではなかろうか。巧姐は第九十二回に、突然成長する〝必要〟があったのである。巧姐が『列女傳』講義の聞き手になることによって、司棋に烈女が重ねられ、さらに黛玉にまでそのイメージが漂う。つまり、巧姐の「忽大」「暴長」問題は、後四十回最大の山場、林黛玉の死へと連なるものであったのである。

おわりに

（1）まとめ

以上、本稿では、巧姐がなぜ第九十二回に突然成長したのか、という巧姐の「忽大」「暴長」問題を皮切りに、『紅樓夢』續作部分後四十回を流れる構想の一端を見てきた。突然成長した巧姐は、「林黛玉の死」という後四十回最大の山場を見据えての一連の構想（〝①「黛玉の死を描くために」→②「司棋の死が設定され」、そこに「烈女」のイメージを重ねるために→③「巧姐が『列女傳』講義を聞く「慕賢良一回」が設定された」〟、という發想の流れによる構想）が生み出した續作者苦心の結果だった。もちろん彼女の成長が時間の流れと整合していない點は、やはりミスであるに違いない。假に續作者と整理者の二人を想定するにしても、巧姐の年齢が不統一のまま殘ってしまったのは、ミスである。しかしそのミスにも、續作者なりの理由（意圖）が背景にあったのである。確かに續作者の描いた林黛玉には、烈女の激しさはない。むしろ正反對の弱弱しい性格で描かれている。しかし續作者は、讀者が黛玉の死の場面を讀んだ際、その心意氣に「どことなく烈女に通じるものがあるではないか」と感じさせよう、と意圖しているのである。

この一連の構想には、林黛玉の結末を少しでも肯定的な方向へ近づけ、同情すべき形にしよう、との續作者の意圖が垣間見える。烈女そのものについては、明清當時贊否兩論あったようであるが[20]、少なくと

も續作者の筆致はそれを肯定的に描いている。このことは、主人公賈寶玉が「守節的」の女性達について講義する點、巧姐がそれに感銘を受けている點などの事實一つをとっても窺える。後四十回は、〝『紅樓夢』の結末をなるべく（續作者がそう考えたと思われる）肯定的な方向へ近づけようとすること〟、を目指して構想されている、のではないか。[21]

なお、主人公賈寶玉が巧姐に『列女傳』講義をすること自體にも、續作者の思想が表れていると思われる。寶玉の側に注目して言うなら、彼が『列女傳』を講ずることができる最も相應しい候補として巧姐が選ばれ、その爲に巧姐を「忽大」させた、とも言える。後四十回の構想を探る手がかりとして、賈寶玉の形象は、稿を改めて論じたい。

本稿で考察してきた續作者の構想は、曹雪芹の描いた前八十回の構想とは著しく異なる（もし曹雪芹なら林黛玉の死ももっと違った形だっただろう）。筆者は、後四十回の續作者は、曹雪芹とは全く異なった價値觀を持っており、その價値觀に從って後四十回が書かれていると考えている。今後論考を重ねて、前八十回と後四十回の相違を明らかにしていく心積もりである。したがって、筆者の後四十回探索においては、前八十回の諸場面とははっきりと區別して論じていく立場であることを明記しておきたい。同樣に、本稿で論じた續作者の意圖が、讀者に傳わっていたか否かというのもまた別の次元の問題と考えるものであり、それとも區別したい。

(2) 後世の評價

なおこの賈寶玉の『列女傳』講義の場面は、後世頗る評判が惡い。例えば、馮其庸氏は、第九十二回「慕賢良一回」における賈寶玉の『列女傳』講義に評を付し、「寶玉が『女孝經』『列女傳』について講釋するのは、大いに前八十回に描かれているところに反する」、「寶玉がなんと貞節を守る話について講釋するのは、前八十回の寶玉とはまるで別人のようだ」、「寶玉が巧姐に『女孝經』『列女傳』等について講釋してやるのは、前八十回とは明らかに異なる」と、繰り返し前八十回との不連續、違和感を指摘している。[22] 一方の司棋の自盡について馮其庸氏は、「司棋、潘又安の死はまた『紅樓夢』に一婚姻悲劇を添えた。これもまた封建婚姻の罪を暴いたものである」と述べ賞贊している。[23] 馮其庸氏以外にも「司棋が自殺するストーリーは、……これは續書中の比較的精彩な箇所である」[24]などとの賞贊もある。賈寶玉の『列女傳』講義とは正反對に、後世頗る評判が良いと言えよう。批判されるのも賞贊されるのも、いずれも曹雪芹の原作部分（前八十回）の二番煎じを離れて、その箇所に續作者の獨自性が强く表れている證據であろう（その他の續作部分には安易な前八十回の二番煎じが多い）。考察してきた如く、兩者は「同時刻」ということで結びつけられた、「林黛玉の死」を見據えての一連の構想だったのだが、後世全く正反對の評價を受けてしまうことになった。その點は大變興味深い。

(3) 同時刻という設定

最後にこの「同時刻」という設定について付け足しておきたい。興味深いのは、林黛玉の死そのものにも似たような手法が用いられている點である。林黛玉が絕命した瞬間には次のような記述がある。

當時黛玉氣絕、正是寶玉娶寶釵的這個時辰。

その時、黛玉の息は絕えましたが、それはまさに寶玉が寶釵を娶ったこの時刻なのでした。（第九十八回）

林黛玉が絕命した瞬間は、まさに寶玉が寶釵を娶ったのと「同時刻」であったという設定なのである。讀者に、林黛玉の悲慘さ、また林黛

玉と思い込んだまま寶釵を娶った寶玉の悲惨さを效果的に傳えようとの設定であろう。二つの場面を「同時刻」と設定することによって、讀者に兩方の場面を連想させようというのは、續作者の好んだ一つの手法であったようである。

注

(1) 張問陶「贈高蘭墅鶚同年」の詩題下自注に「傳奇紅樓夢八十回以後俱蘭墅所補」(『船山詩草』卷十六所收。中華書局一九八六年版を參照)とあること等から、後四十回の作者は、高鶚(高蘭墅)とされることが多い。しかしその「所補」が、どの程度のものなのかよくわからない。また高鶚以前に後四十回の作者を別に想定する考えもあり、有力な說と見られている。しかしいずれにせよ後四十回の構想を立てた「誰か」はいたはずなので、その人物を本稿では「續作者」と稱する。その「續作者」が何者なのか、等については本稿では問わない。

(2) 兪平伯「後四十回底批評」(一九二三、上海亞東圖書館『紅樓夢辨』上卷所收)、趙岡「脂硯齋與紅樓夢(上)(中)(下)」(一九六〇、『大陸雜誌』第二十一二、三、四)、伊藤漱平「『紅樓夢』の脇役たち—王熙鳳の娘およびその他の諸人物に就いての覺書—」(一九六八年『人文研究』二〇—一〇、後に汲古書院刊『伊藤漱平著作集Ⅱ』所收)、野口宗親「『紅樓夢稿』後四十回について」(一九七二、『集刊東洋學』二八)、薛洪「從〝脂稿本〟看《紅樓夢》后四十回的作者」(『社會科學戰線』一九七八—三)等參照。

(3) 松枝茂夫「紅樓夢年表(第八十一回—第百二十回)」(同氏譯『紅樓夢』第十二卷所收、岩波文庫)參照。

(4) この第九十二回は、「程甲本」と「程乙本」の異同が多い。しかし筆者の論旨に關わる內容上の異同はないので、本稿では刊行年の早い「程甲本」を參照する(「程乙本」は「程甲本」を改訂したものである)。なお、第九十二回の異同に關しては、王佩璋「〝紅樓夢〟后四十回的作者問題」(人民文學出版社『紅樓夢研究論文集』所收。「光明日報」一九五七年二月三日原載)が詳しい。

(5) 『程甲本紅樓夢』(一九九二、書目文獻出版社)による。また兪平伯『紅樓夢八十回校本』附錄の後四十回なども參照。

(6) (注2)前揭兪平伯氏論文參照。第九十二回には、引用の場面の他に、巧姐が針仕事の技術を學んでいることも語られている。兪氏は、こういった點も踏まえて、第九十二回の巧姐は最低でも七、八歲は超えているとする一方、第一百一回の巧姐は三歲以下、多くても四歲を超えまいと指摘する。更に第一百十七回に巧姐が十三四歲で登場することも踏まえて、こういった樣々な巧姐の年齡變化を「簡直是個妖怪」—妖怪のようだ、と評する。

(7) 「脂硯齋本」第二十七回、第二十九回の記述などから窺える。王熙鳳に元來二人の娘が設定されていた痕跡に關しては、(注2)前揭伊藤漱平氏論文、兪平伯「紅樓夢八十回校本序言」(『紅樓夢八十回校本』所收)等に詳しい。

(8) (注2)前揭趙岡氏論文參照。

(9) (注2)前揭野口宗親氏論文參照。

(10) (注2)前揭薛洪氏論文參照。

(11) 例えば日本における論考、伊藤漱平「曹霑と高鶚に關する試論」(一九五四、『北海道大學外國語外國文學研究』二、後『伊藤漱平著作集Ⅰ』所收)には「その四十回中に於いては巧姐のごとく超人的成長ぶりをみせる失態まで演じている」とあり、また村松暎「『紅樓夢』後四十回の評價」(一九五八、『慶應義塾創立百年記念論文集』)でも、「高鶚の續作には……巧姐の年齡に混亂がある等の明かな失策もある」等とある。

(12) 曹雪芹による設定では、「姑舅兄弟」(從弟)(第七十一回)となって

いる。

(13)『三國志』魏書諸夏侯曹傳裴松之注引皇甫謐『列女傳』。

(14) 高洪鈞「李慶辰評點《紅樓夢》」(『紅樓夢學刊』二〇〇五―四)、劉繼保・卜喜逢輯『紅樓夢名家匯評本』(二〇〇八、北京圖書館出版社)参照。

(15) 湯淺幸孫「シナに於ける貞節觀念の變遷」(一九八一年同朋社出版同氏著『中國倫理思想の研究』第二部所收。一九六七年『京都大學文學部研究紀要』一一原載)参照。

(16) また(注4)前掲王佩璋氏論文に見られる意見も注目に値する。王氏は高鶚以前に別人の續作者を想定し、高鶚を整理者と見るが、回目に「巧姐慕賢良」とあるにも關わらず、巧姐の反應が殆ど無いことに注目し、續作者の原本が整理者(高鶚)に流傳する間に、この回の內容が一部脫落したのではないかと指摘するのである。もしそうなら續作者の原作では、「慕賢良一回」は第一章で掲げた內容とは違ったものであったことになる。そこでは司棋の死に繫がるイメージがもっと鮮明であった可能性もある。

(17) 王熙鳳の娘が元來二人であった點は、この問題とは無關係であろう。「脂硯齋本」第二十七回、第二十九回に留めていた王熙鳳の二人の娘の痕跡は、「程甲本」「程乙本」ではいずれも削除されるとともに、巧姐は大姐が改名した人物であること(卽ち王熙鳳の娘は一人であること)が隨所に强調されているからである。

(18) この點については、拙著『『紅樓夢』成立の研究』(二〇〇五、汲古書院)第三章第一節で述べた。

(19) 伊藤漱平「『嬌紅記』の成立とその演變及び流傳」(汲古書院刊『伊藤漱平著作集Ⅲ』所收)には、絕食を實行に移し命を縮めるこの林黛玉の死と『嬌紅記』のヒロインの死の相似が指摘されている。

(20) (注15前掲)湯淺幸孫氏論文等参照。引用は省略したが、司棋の死を聞いた王熙鳳は司棋を「傻丫頭」と評しているし、また司棋の死の報告者も、彼女を「糊塗」と言った。これらは、烈女に對する否定的な見解を代辨したものとも言えよう。しかし、これは續作者自身とは別と考える。

(21) 後四十回の思想に關しては、そもそも「程甲本」に付された高蘭墅の序に「尙不謬於名敎」とある。また文雷「程偉元與《紅樓夢》」(『文物』一九七六―一〇)等参照。

(22) 馮其庸重校評批『瓜飯樓重校評批《紅樓夢》』(二〇〇五、遼寧人民出版社)第九十二回眉批、回後評参照。原文は次の通り。「寶玉講《女孝經》《列女傳》、大反前八十回所寫」、「寶玉竟講守節的故事、與前八十回的寶玉判若兩人」、「寶玉爲巧姐講《女孝經》《列女傳》等、已與前八十回截然不同」。

(23) (注22)前掲馮其庸氏書第九十二回回後評参照。原文は次の通り。「司棋、潘又安之死又爲《紅樓夢》添一婚姻悲劇、則亦是揭封建婚姻之罪也」。

(24) 毛德彪・朱俊亭等編著『紅樓夢注評(增訂本)』(一九八八、廣西敎育出版社)第九十二回回目評點参照。原文は次の通り。「司棋自殺的情節……這是續書中比較精彩的地方」。因みに賈寶玉の『列女傳』講義について、同書同回回目評點は、「……這就使賈寶玉這個封建階級的叛逆者變成了一個封建禮敎的鼓吹者、嚴重歪曲了賈寶玉的性格(これは、賈寶玉というこの封建階級の反逆者を一人の封建禮敎を鼓吹する者に變えてしまい、甚だしく賈寶玉の性格を歪曲してしまった)」と、やはり馮其庸氏同樣に「歪曲である」と批判している。